【土木計画学研究・講演集 No.13 1990年11月】

場所の固有性からみた地域の解読と再構成に関する研究 ―大阪上町台地を例にして―

THE STUDY OF A REGIONAL ENVIRONMENTAL PLANNING BY MEANS OF ANALYSIS OF THE IDENTICAL---IN A CASE OF UEMACHI-DAICHI

○近藤 隆二郎* 盛岡 通**
By Ryujiro Kondo, Tohru Morioka

One of the identical characteristics of the area taken into consideration in regional planning will be found out in its historical literacy and understanding cultural heritages. Researchers know much more what have done in this area by interpreting the contents of written books and drawn maps.

We present an image plan of Uemachi-daichi in Osaka, emphasizing topological properties and sacred hollyness in plateau. According to the results by analysing some literatures pertinent to this area, this area was seemed to be characterized by tiny scenes of concave and vella vista with anthoropological meaning. Three major themes are established as the concept of this image plan. Those are, 1)looking at the evning sun, 2)a pilgrimage toward the sunset cosmos, and 3)festival spots apart from daily societal constraints for sightseeing, taking a walk and "Monomi-usan".

Citizens were invited to enjoy the environment in installed event in Uemachi-daichi. Images of the plan, represented by poster panels set in the route of orientaling, become of awareness, conceivable by participants, and in their memories.

1．問題提起・背景

地域とは「人間の持つ深層意識が時間をこえて造形する対象[1)]」であり、単に現状からテーマを引き出すのではなく、そのテーマがなぜこの地域に生まれたのか、あるいはそれを支えてきた人間の営みとは何なのかといった文化のコンテクストの中で地域を見ることが必要である。それは地域そのものの持つ固有性（構造[2)]）を抽出することとも言える。

当研究では大阪の上町台地を例に、この地域の「構造」を抽出し、それにしたがって地域像を再構成する一つの試論を展開する。さらにその見方を確認する作業として行ったイベントについても触れる（図1参照）。

2．都市の解読と再構成の現状と問題点

いままでの地域像は、地域資源としての現在の資源と歴史の要素などを並列に扱い、その環境を統一

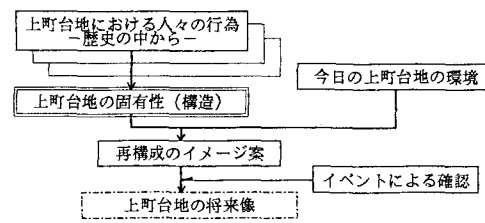

図１ 研究のフロー図

するイメージキーワードによりテーマを決定している。しかし、歴史の史実と現状の間には時間的変容がある上に、それを並列化されたままにおくには無理がある。歴史から読み取ることでは、その時代ごとの人とのつながりを踏まえて、場所の持つ潜在的だが持続する固有性がいかに扱われたかという視点を持つことに意味がある。

言うまでもなく、歴史から引き出した「構造」に沿って地域像を再構成するとき、その「構造」はそのままでは現状の地域には当てはまらない。物理的にも昔とは変容している要素が存在し、現状の市民に受け入れられやすい地域像への焦点づけが必要である。つまり、現状にふさわしい「構造」に基づく

* 学生会員 大阪大学大学院 工学部環境工学科
**正会員 大阪大学助教授 工学部環境工学科
（〒565 吹田市山田丘2-1）

再構成手法を用いるには、ある検証を取り入れなければならない。そのひとつは、イベントを企画しその再構成に基づいた演出を行い、市民の参加により検証するものである。

3．上町台地の解読

大阪の上町台地を例にとり、物理的に空間が形成されてきた過程と、市民に利用されながら意味を付与され、どの空間として成熟していったのかを文献等より検討した[3]。この手順を通して、この空間の固有性（構造）を導き出した。その歴史過程は大きく５つに分かれる。

(1) 外交・軍事上の要衝へ－前史－

縄文時代のはじめ頃には現在の大阪の中心市街地は海面下にあり、大坂湾の海水は上町台地の北側を通ってその東側にまで入り込み、上町台地は細長い半島のように突き出ている海岸の丘陵地であった。岬の突端には磐舟神社があった。古くは「難波津」と呼ばれ、大陸の文化が瀬戸内海を通ってまずこの地に上陸したことから朝鮮半島との交通が開け、多くの朝鮮人がわが国に渡来した。つまり、当時の外交・軍事上の要衝として古くから開けたところである。

古代から、台地という地形と海に面した位置により大阪の中で境界性[4]と交流性を持つ特殊な空間を形成していた。

(2) 四天王寺の建立－古代－

そのような軍事・外交上の要衝であった上町台地に四天王寺が建立されたのは推古元年(593)であり、それは鎮護国家を願ったものである。ついで大化元年(645)には難波長柄豊崎宮に都がおかれた。その後聖武天皇による大修理の後、天平16年(744)に難波宮となる。四天王寺一帯は、古代大坂の主要な要衝のひとつであり、「寺内四面内」に坊舎が密集し、寺自体が一個の寺内町－小都市を形成していた。しかし、都が京へ移されたため、寺を除いてすべて田園へと帰した。

すなわち、四天王寺・難波の宮といった国際的・全日本的な機能がこの地に存在したことは、古代からの特殊な境界性が、安定した地盤と水陸交通の要衝の地という長所として位置づけられていたことを意味する。

(3) 浄土思想の聖地へ－中世－

寺内町・石山本願寺・古代以来の有力寺院・四天王寺を核とした門前町などの中世特有の中小都市群が点在するように成立した。また、極楽浄土を願う浄土信仰が興隆し、四天王寺では、落日遙拝の西門前が日想観の霊地として栄え、天王寺詣りの盛行を招いた。ちなみに、石造りの鳥居には現在でも「釈迦如来転法輪所、当極楽土東門中心」という額がかかっている。四天王寺の彼岸会に参詣した人々は、夕陽の沈む頃、西門を出て岸辺に立ち、口々に高声念仏をしながら西方を拝んだ。藤原時代から鎌倉時代にかけて一宗を開いた僧侶達や京の公家達が皆この西門で、彼岸の落日を拝する日想観を修した。こうして天王寺村は彼岸詣でや千日詣りに群がる人々で繁栄し、門前町形成をみた。また、この高台に沿う一帯は日想観修行の霊地であるとともに、逢坂・天神坂・清水坂・愛染坂・口縄坂が崖下と通じ、天王寺七名水の多くもここに集まる景勝地で名所旧跡も多かった。

つまり、台地の特殊性が交通・軍事の拠点として利用されていたものから、「夕陽を見る」という宗教・文化的なものに移ったのである。ここにきてその特殊な空間性は物理的機能から宗教的なものを含むものへと変化する。それは、上町台地が、平坦な大坂平野において唯一市民が見上げる地形であり、かつ台地の上からは見おろすという視点の変化の効果が大きかったのだろう。物理的境界性に宗教上の意味的境界性が加わったと言える。

(4) 寺町空間の形成へ－江戸時代初期－

大阪夏の陣後、初代の大阪城主となった松平忠明は元和元年(1615)に、秀吉の築いた大阪市街地の整理・再編事業を行った。このとき、一向宗を除く市内の各寺院を天満、小橋、東西高津の各村に整理・統合し、寺町を建設した。これは、この地域が大坂城及び城代勤番の士の邸宅に近く、一朝有事の際武士の宿泊所として利用の意図があったことによる。

再編されることになって「寺町」という空間構成を得たことは偶然ではない。既に大坂城が上町台地の北端のシンボル性を持つ地にあったことが寺町を誘導したことになる。すなわち、古代から継承されている上町台地の境界性が単なる市街地の形成ではなく、ある意味で非日常的な「寺町」を選択させたのである。再編成によって宗教性の高い意味的境界性は密度を濃くし、今日の夕陽ヶ丘地区の空間構成の基礎を築いた。

(5) 遊興空間としての全盛期－江戸時代中期－

庶民文化の成熟につれて、四季の花見を兼ねた寺社めぐりや月見・夕涼みなど大阪町人の奥座敷的な行楽地となり、三郷の豪商が好んで別荘をここに求め、文人墨客また草庵を営んで想を練るなど、上方文化の故郷ともなった。人々は精進落しと称して、雅俗貴賤を問わずこの寺町界隈に集まったのである。

上町台地が最も庶民を引き付けたのはこの時代である。古代から続いている物理的な境界性によって様々な歴史を経緯したことにより、この空間に歴史性が積み重なるとともに、その宗教性と地形性が「夕陽を見る」という行為で一致することによって「聖地」としての性格を持った。江戸時代という庶民文化が盛んな時期においては、都市近郊の行楽地として人気を得、さらに花見、遊廓、料亭といった総合遊興地を形成することになった。そして、その物理的境界性、意味的境界性を取り込んで非日常性を拡大した時代が「浪華の賑ひ」などに数多く描かれている情景をもたらした。

4．上町台地の固有性（構造）のまとめ

（1）テクストにおける固有性

以上の考察から、上町台地とは大阪の人々にとって物理的境界性と意味的境界性により非日常的な「境界」を形成して来たと言える（図２参照）。それ

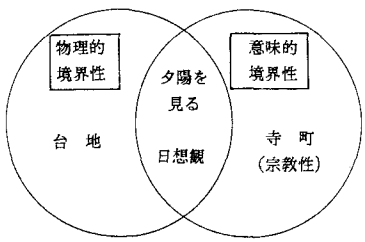

図２ 上町台地の持つ境界性の構造

は、上記の歴史の過程だからだけではなく、様々な文学作品や絵巻物といったテクストからも読み取ることができる。「浪花百景」でこの台地からの眺めを中心に数多くの場面を提供している[5]ことは、この物理的境界性を表すものである。江戸以降の経過については、詳しくは述べないが、そのひとつとして昭和７年に刊行された「近代大阪」の「高津・生玉寺町」という項では、「歩いてみると、ここだけは残された蓄い傳統の浪華の俤をいろいろなところから感ぜられるやうな気がした。大阪はいま非常な勢ひで、すべての憶ひ出を破壊し盡さうとしてゐる。しかし、市の東を区切つて、一帯の丘をなしてゐるこの高臺までは、まだおもひ切ったきった開削の手が延びてゐない。町にも、道にも、家にも、森にも、昔ながらの浪華の寂びた色が、そのまま濃く染め出されている。」[6]というように語られ、大阪の中でのその境界性がうかがえる。

（2）上町台地の固有性（構造）のまとめ

現在でも実際に歩いてみると、その寺の多さ、史跡、有名人の墓碑などいかに歴史性・伝統性が豊かであるかがわかる。しかし、それはあくまでも「注意して」眺めると掘り出すことができるのであって、注意しなければ見えてこない。

上町台地の将来像を描くときには、この台地がかつて持っていた大阪における固有性－「物理的境界性」と「意味的境界性」から成立している－に沿って構想しなければならない。それは同時に現代の市民にとってこの空間の価値を再認識させる。

5．上町台地の再構成への基本理念

以上から今後の上町台地の姿について描いてみる。まず中心に考えるのはソフト面である。ハード面から発想すると現実的な条件が重なって、手をつけられなくなるか、もしくは先導するハードが浮き上がることが多い。むしろ、「イメージづくり」で意味的に上町台地を再認識することが世論の高まりを促し、かえってハード面での進行も早めると考えられるからである。

現状は、古代から受け継がれていた「物理的境界性」が、台地の高低差としては存在しているにも関わらず、地域の整備に全く反映されていない。そこで、３章において抽出した分脈を生かした方向を模索し、再構成することを試みる。

（1）地域の構造からのテーマの抽出

分脈（構造）を生かすことは、上町台地では「物理的境界性」を基礎にする。そこで、「物理的境界性」と「意味的境界性」の接点である「夕陽－日想観」を復活させることを構想の中心とする。このテーマは、夕陽－太陽が将来にわたって存在していることと、台地の地形より「夕陽を見ることができる」こと、さらには「夕陽ヶ丘」という地名からのゆかりなどにより、現在でも有効である。この「夕陽を見る」ことでイメージをつくる段階では、当時の文化的背景として、日想観という太陽と人間のかかわり合いをとらえなければならない。その背景から当

地域を位置づけることは、現代の人にとってどのような意味を持つかということを明確にする。簡単に太陽と日本人の関係は次のようである[7]。

日本は日出ずる国であり、太陽の国である。わが国固有の歴は太陽歴で、冬至は太陽がよみがえりに転ずる重要なトキである。更に、空間を軸とすると、春分・秋分は真東から太陽が立ち上がり、真西に沈むという生死の軸とも見ることができる。その東と西をつらねて「太陽の道」を考えることは当然であり、必然でもあった。伊勢から大和を経て淡路に及ぶ太陽の道－北緯３４度３２分－は有名である。古代人は罪汚れを水に流すことで消えてなくなるものとは思っていなかった。水に流れてもその核（本質）は存在しており、太陽によって徹底的に清めなければならなかった（日想観）。太陽の沈む難波の海と母の国である根の国－ニライカナイ－とはつながるものである。

つまり、西門の浄土信仰とは、日本人が古来から抱いていたカミとしての太陽を崇拝し同時に冬至・夏至、春分・秋分と結び付いて生活のリズムを持ち、その祭祀を通じて宇宙観や生命観を見いだしていたのである。太陽－地球という宇宙観から生－死という生命観に結び付ける行為であった。上町台地の日想観を現代風に復活させることは、自己確認性を失いつつある都市民に対してある宇宙観との対話を機会として提供すると言えよう。

（２）地域の構造からコンセプトへ

単に日想観を復活するだけでは、台地そのものの再認識には結び付きにくい。上町台地そのものを日想観を行う「聖地」にすることが境界性の再現につながる。ここで、もう一度上町台地の歴史空間に戻ると、そこにはいくつかの「行為」が描かれている（図３参照）。台地としての広がりから、寺社めぐりや墓めぐりといった「めぐり」の行為が抽出できる。また、花見や料亭といったものからハレの場－遊興空間としての「祭り」が考えられる。この「めぐり」と「祭り」の行為は、人々が上町台地を「境界」として認識してきたなかでの行為であるから、その構造を復活させる構想にも用いることができる。

「物理的境界性」と「意味的境界性」の両方に見られる「めぐり」の行為から、「太陽への巡礼」を考える。これは台地上に夕陽を見ることのできる視点場を霊場として設置し、それをつなぐコースをめぐり、日想観の霊地としての上町台地を再認識する。

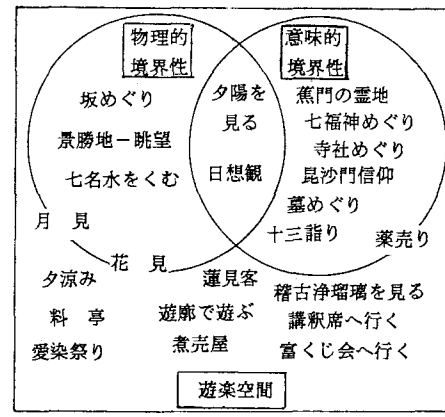

図３ 上町台地における市民の行為（江戸時代）

また「夕陽を見る」という行為の最大の「聖」としての「彼岸の中日」を設定する。四天王寺西門の中心に夕陽が落ち、「太陽の道」が現出するトキである。年二回、かつ天候に恵まれないと見ることのできない情景である。この「彼岸の中日」と「太陽への巡礼」によって中世に形成された太陽を眺めるという文化を再現する。

その「聖性」の反転として「祭り」である。ハレの空間であり、緊張から解放へと様変わりさせる。花見や月見などの集団的な形態をとり、過去の有名な料亭を仮説的なＢＡＲとして復活させる。また、名所・旧跡等をテーマにより分類して散策コースを設定する。

この「太陽への巡礼」「彼岸の中日」「祭り」を上町台地の再構成案の基本コンセプトとする（図４参照）。

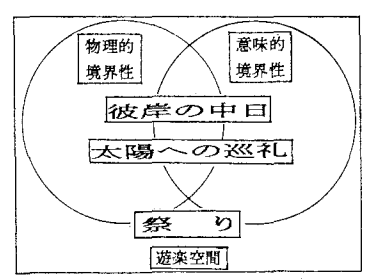

図４ 上町台地の再構成のイメージ案

（３）コンセプトと実在の地域資源との対応

コンセプトが大枠で決まったので、次にはコンセプトに対応する現実の空間・場を選び出す。

(a)「太陽への巡礼」

「巡礼」の特徴をまとめると次のようになる[8]。

①それ自体が儀礼過程としての完結した形式を持つ
②聖と俗が重層しながら、全体の<聖>を形成する
③<歩く>という身体を動かす(苦難)ことを重んじる
④個人が自己に直面するための手段であり、「自己覚醒の儀礼」となる
⑤白装束のような非日常の姿をとることで周囲に対して「異人」となる

日常的な雰囲気である現在の上町台地では、むしろ訪問者が「巡礼者」という脈絡をもつことによって空間を解釈していく方法が有効であり、それはまた「聖なる太陽」というイメージを会得する手段にもなる。この「太陽への巡礼」では、次の視点から霊場（ポイント）を選び出した。

Ⅰ夕陽を見ることができる(視点場･眺望)
Ⅱ太陽と関係とある縁起を持つ(歴史･ゆかり)
Ⅲ適当に散らばることが望ましい(分布)
Ⅳいわゆる有名であるもの、歴史が豊富なもの

Ⅰは必要条件であり、次の９ヶ所を設定した。

① 生国魂神社 ② 青蓮寺 ③ 珊瑚寺 ④ 家隆塚 ⑤ 勝鬘院 ⑥ 大江神社 ⑦ 清光院 ⑧ 安居神社 ⑨ 四天王寺

この９ヶ所を順番に歩くコース(太陽の道)を設定したが、その脈絡づけに留意した点は次の３つである。

1.各ポイントの持つ意味（縁起）と設定された意味（太陽）とのつながり（視点Ⅱ）

眺望点として「太陽」とのつながりはあるが、出来るだけ各寺社の持つ縁起・ゆかりなどに沿った中で「太陽」とのつながりを強調した。例えば、第一番の霊場である生国魂神社では、西の海に向かってのハラヒである八十八島祭（冬至新嘗の太陽回復につながるもの）を切り取った。第四番の家隆塚では、藤原末期の有名な歌人家隆が、彼岸に西の海に沈む夕陽をみて、「契りあれば　なにはの里にうつりきて　波の入日を拝みつるかな」と歌を詠んだ故事にゆかりをもとめたなどである。

2.各ポイント間の脈絡づけ・つながり

テーマが「太陽」であり、かつ各素材は宗教的なものばかりであるから、「９」という名数の設定を宗教的な世界－「タントラ(Tantrizm)」[9]における「九輪(NAVA-CAKRA)」－から位置づけた。これは、九つの輪からなり、個人が自己に直面し、そのなかに真実－宇宙を見い出す瞑想の手段として用いられる。外から内の一点に向かっているつながりを九つの霊場間に取り入れた。

3.地形の活用によるコースの設定

上町台地の物理的境界性はその高低差によるものであり、巡礼のコースとしても坂の上り下がりといった微地形のヒダを取り込み、全体としてリズムをつけた。

以上により、「太陽」という意味と各霊場がつながり、「太陽への巡礼」としての一体感、脈絡づけ、意味を構築する準備ができた（図５参照）。

第一番	生国魂神社	入口としてのハラヒ
第二番	青蓮寺	太陽の象徴
第三番	珊瑚寺	太陽の力
第四番	家隆塚	太陽のコスモロジー
第五番	勝鬘院	太陽の世界
第六番	大江神社	太陽の恵み
第七番	清光院	悟りへのハラヒ
第八番	安居神社	宇宙の根源
第九番	四天王寺	原始の鼓動

図５　各霊場の名称

(b)「彼岸の中日」

このとき四天王寺西門では、太陽が真東から上り、真西に落ちる東西軸に落日と西門の石鳥居が重なり、「太陽の道」が姿を現す。難波の海がなくなった現在でも、ビル街の裂け目に落ちる情景は素晴らしく、その聖空間は生き続けている。また、太陽の象徴としての「鏡」を用いた演出等も考えることができる。年二回、春分・秋分でかつ晴天であるという時間的条件と四天王寺西門という空間的条件が一致して始めて実現する世界である。

(c)「祭り」

「祭り」では上町台地を「祭り」の空間－奥座敷－にし、人々の集まり憩う場にする。その「核」として徳川時代末期から明治にかけて上町台地の景勝地に散在していた料亭を用いる。料亭を現代的に「仮説的なＢＡＲ」とする。「浮瀬」「西照庵」「福屋寡席」の料亭の名をつけたものと「家隆」と呼ぶ４つのＢＡＲを各霊場に近い広場に設定し、「巡礼」後の遊楽空間を特徴づける。

また、散策としては、この界隈に数多くある有名墓碑や歌碑等のテーマ別回遊がある。役者墓や文人墓などのテーマが考えられるが、その一つとして「芭蕉祭」が可能である。芭蕉と天王寺とは縁が深く、あちらこちらにその供養碑が残っている。これらを巡ることで、芭蕉に親しみ、界隈の雰囲気を味わうことを狙いとする。もちろん図３から考えられるように遊楽行為としては他にも多様な形が提案できる。

以上のコンセプトを簡単に示したものが図６である。

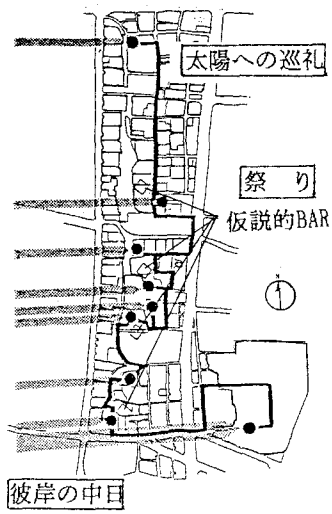

図６上町台地の再構成基本案概念図

６．コンセプト確認としてのイベント

以上により、ひとまず、上町台地の持つ固有性（構造）を基礎とした一つの再構成を紹介した。再構成についてはいろいろとバラエティがある。しかし、強調したいことは、対象地域の持つ固有性を無視すべきでないということであり、その分脈に沿って整備も方向付けられるべきであるということである。また、再構成した形態や機能を評価するのは現在の市民である。現在の市民にとっての地域像が形成されなければならない。今回のこの解読と再構成はあくまで将来像に対するひとつの意見であり、これを市民がどのように受け入れるかは別である。受け入れられやすさを確かめる過程を経た後に初めてその再構成案が有効かどうかが言えるだろう。

そこで、当コンセプトの確認のひとつとして、上町台地で実際にイベントを行った[10]。前述のコンセプトに基づき、「太陽への巡礼」をウォーキングラリーのようなスタンプラリーにして市民を対象に行った。その結果、「ユニークである」という声と共に、概ね好意的にこのコンセプトは受け入れられた。一回のイベントですぐに評価できるのものではないが、その確認の一歩としては提案したコンセプトは有効であると言えそうである。

７．今後の課題

当研究の試みは、地域の将来像を描くときに、単に条件整理からの地域像ではなく、その地域が歴史的に果たしてきた経過をテクストとして読み取り、地域が持つ構造を捉えてから構想を現代的に組みたて直して進める過程を上町台地を例にして考察した。

今後の課題としては、

①再構成した地域像が現代市民にとって受け入れられるかを確認する方法を確立する必要がある。どのようなイベントで行うか、あるいはイベント以外にはどのようなものがあるかといった考察を深め、併せてその結果をどのように再構成案にフィードバックさせるかという過程を構築する。

②地域の持つ固有性を抽出する手法を地域の属性ごとに分類する必要がある。上町台地は歴史の濃厚な空間であるが、そうではない新興地域等における固有性（構造）をどのように摑み取るかということも研究課題である。

参考・引用文献

1)槇文彦他;見えがくれする都市,鹿島出版会,1980
2)槇によれば、「構造」とはある都市、及び都市をつくり出した地域社会特有のいくつかの原則、及び原則間の関係を明らかにすることによって次第に得られるものである（前掲書）
3)文献は主に次のものを用いた。
「大阪の歴史」研究会編;大阪近代史話,1985
原田伴彦他;大阪古地図物語,1980
牧村史陽編;難波大阪－郷土と史跡－,1975
大阪府編;復刻版「大阪府神社資料(上巻)」,1986
川端直正編;天王寺区史,1955
高橋康夫･吉田伸之編;空間,1989
鳴海邦硯･橋爪紳也編;商都のコスモロジー,1990
四天王寺教学研究所;聖徳太子と四天王寺,1987
4)近藤隆二郎･盛岡通･末石冨太郎;現代都市における境界概念の意味論的考察,第2回環境ｼｽﾃﾑ研究,VOL17,1989.pp12-17
5)鳴海邦硯他;「浪花百景」に描かれた近世大阪の都市景観構造に関する考察,第23回日本都市計画学会学術研究論文集,pp223-228
6)北尾遼之助;復刻版「近代大阪」,創元社1989.p208
7)吉村貞司;原初の太陽神と固有歴,六興出版,1984
8)青木保;境界の時間,岩波書店,1985
9)「タントラ(Tantrizm)」とはインドの信仰大系のひとつであるが、宗教ではなくひとつの象徴表現である
10)盛岡通･近藤隆二郎;まち巡りの体験誘発による環境づくり支援,第3回環境ｼｽﾃﾑ研究,VOL18,1990